

身振りのミメシスの・表象的な性格

—— 人文社会科学における身振り研究の展望 ——

クリストフ・ヴルフ

(河野桃子、田口康大、渡邊福太郎訳)¹⁾

ベルリンにおける儀礼研究を通じて、儀礼および儀礼化プロセスが子育てや教育、社会化に対してもつ中心的な意義が確認され、教育に関心を抱くすべての人々の目に見えるものとなった (Gebauer/Wulf 1992, 1998, 2003)。身振りは、子育てと社会化において重要な役割を担うことが明らかとなった。このことは、家族、学校、仲間集団、メディア使用といった、社会化の多様な領域における身振りの発生とその使用についての調査計画を展開させ、それゆえ教育学の内部における身振り研究の確立を促した。いくつかの先行研究によってこうした研究の妥当性が示されてはきたものの (Rosenbusch/Schober 2004; Heidemann 2003; Barth/Markus 1996; Kotthoff 1998)、子育てや教育、社会化における身振りのコンテキストと行為様式を調査する包括的な研究は、この領域には存在しなかった¹⁾。もう一歩進んだ目的として、身振りのもつ権力と暴力の潜在力を分析するということがあった。これにはたとえば、教育的状況におけるコミットメントと距離を取ることに絶えざる交代を可視化する能力や、承認や排除、認可といったプロセスでの身振りの使用や、教育的コンテキストにおける社会的立場の強調などが含まれる。教育的な行為は、家族、学校、仲間集団、メディア使用などの領域における制度によって作られた枠組みに様々な仕方で依存しており、その差異によって比較のための重要なコンテキストが提供される。

われわれは現在、教育的な身振りの実践的で反省的な潜在力を調査している。というのも、われわれは身振りを社会的関係の安定化のためだけでなく、教育的なプロセスへの介入のためにも使用するからである。われわれはここで、ベルトルト・ブレヒトとヴァルター・ベンヤミンの身振り概念を採用している。彼らの概念化に従えば、身振りは借用されるものであり、それによって状況から距離を取るこ

とや状況に介入することが可能となる。身振りに反省を加えることによって、その特別なメディア的性格とともに身振りの潜在力が明らかとなる。このようにして、われわれは身振りのみに焦点を当てるのではなく、むしろ身振り性 (gestuality) に関するより広い概念を取り入れるために、調査対象とエスノグラフィー的方法をともに拡大した。身振りが単独で取り出され、重要性をもつためには、身振りを教育的な描写 (educational tableau) の一部分として、ある教育的状況における身体的な動きのなかで観察する必要がある。教育的な身振りの行為様式に関するわれわれの分析は、表象される身体的振舞いの意義に関する既存の洞察を補い、これに関係する教育的な伝統を復興させることを目的としている。

教育における身振り研究をはじめるとあたって、われわれはまず多様な身振りの概念を探っている。たとえばアガンベンは、身振りとは潜在的に反省的な「手段性における手段 (means in mediality)」であり、行為する (agere) ことや、何かをすること、制作する (facere) こととは区別されるものであると述べている (Agamben 2000)²⁾。ブレヒトは、身振りの「中間性 (inbetweenness)」を弁証法的——または遂行的——な現象として可視化することを、演技者に要求した (Kuba 2005)。ブレヒトが身振りのなものであるという概念によって示そうとしたのは、身振りの複雑さとそのコンテキスト性であった。身振りは中絶の原則 (the principle of interruption) を通じて効果を発揮し、そうすることで状態を可視化する可能性を開く³⁾。身振りを経験的に研究するためには、身振りに関する幅広い定義からはじめることが必要となる。というのも、それが経験的な現象の全範囲を捉える唯一の方法だからである。それゆえ、ジョージ・H・ミードによる身振りの理解は重要な出発点となる。ミードにとって身振りとは、社会的に組織化された動物が、本質的に社会的なものであ

る身体の知覚システムによって相互適応するための基本単位として機能する、身体的な動きの一局面である (Mead 1973)⁴⁾。ケンドン (2004) とマックニール (1992, 2005) による身振りの広範囲な研究からも、重要な示唆が与えられている。

教育における身振り研究のためにわれわれが選んだエスノグラフィー的な方法は、いくつかの実験群や対照群の比較を通じて身振りの影響に関する洞察を得ようとするような、他の学問分野の実験的な研究とは異なっている (cf. Goldin-Meadow 2005, Ch. 6)。たとえば言語学の分野には、身振りを使った発話とそうでない発話によって、あるいは不適当な身振りをういた発話によって、聞き手がどのような影響を受けるのかを分析する研究がある。こうした研究はたしかに重要ではあるが、その多くは身振りの役割と重要性を記号論と意味論のみに基づいて評価するため、身振りのプラグマティックな側面を捉えそくなってしまっている。またよく知られているように、これらの研究には次の事実と関連した利点と欠点がある。すなわち、実験計画によって、われわれの場合で言えば教育的なコンテキストという領域に実際に存在する状況と、かけ離れた状況が生み出されてしまうという事実である。

身振りに関するわれわれのエスノグラフィー的な研究の目的は、身振りの肉体性 (*corporeality*) と身振りのミメシス的、遂行的な性格を調査することにある。われわれが示したいのは、自己表現の形式であり、可視化されないままであり続けたかもしれないものを表象する方法である身振りが、大人や子どもの教育に存在する様々な分野やコンテキストのなかで、どのような仕方でも展開してきたのかということである。(Hüppauf/Wulf 2006)。われわれは身振りの表象と表現の方法に焦点を当てる。身振りがきわめてコンテキスト依存的であるという仮定から出発し、身振りのなかで意図や感情がどのように凝縮され、その結果、子育てや教育にとってどのような重要性をもつのかを示す社会的なコンテキストを調査する。その際の基礎的前提は、身振りは第一に集合的な観念と実践によって、第二に制度的な状況と伝統によって、第三にわれわれが同一化を望むような個人的な条件によって、影響を受けるというものである。

この研究を成功させるためには、参与観察、ビデオ観察、インタビュー、グループ・ディスカッション

を通じて集められたデータの準拠枠を組み立てることが必要となる。またそれによって、解釈やコミュニケーションによる検証を行う際の基礎が与えられる。この準拠枠については以下で論じる。さらに私は現在、教育学および社会科学における研究のコンテキストのなかで身振りの構造を捉える際に特に重要となる、次の領域について考察している。

- ・身体の動きとしての身振り
- ・表現および表象としての身振り
- ・子育てと教育の手段としての身振り
- ・意味を創造する方法としての身振り

これらの領域は、従来の身振り研究ではほとんど注目されてこなかったいくつかの人間学的な特徴を中心に展開し、教育科学における新たな身振り研究の分野にとって重要な領域とカテゴリーを付け加え、それゆえ既存の言説を拡大させるものである。

身体の動きとしての身振り

身振りは身体^レの動きとして捉えられる。身振りは身体^レの表象と表現の様式のなかでも最も重要なものである。人間の身体はいつでも特定の歴史的、文化的様式をとって現れるので、その身振りもまた各々のコンテキストの内部で読まれなければならない。身振りを普遍的な身体言語として理解するような試みは、期待に沿うような成果をあげてはいない。歴史的、文化的人間学の研究は、身振りが様々な文化や歴史的時間に応じて様々な仕方でも理解されることを示してきた (Bremner/Roodenburg 1992)。身振りは意味をもった身体^レの動きであり、それを引き起こした意図のみに基づいて、身体^レの表象や表現の様式を説明することはできない。身体的な表象と表現の様式としての身振り^レと、解釈を通じて得ることのできる身振りの言語的意味との間には、根深い断絶がある。身振りはその意図を超えた内容^レをもち、ミメシスを通じてのみ経験されるのである。

身振りは、あらゆる言語コミュニケーションと社会的な相互作用のなかで主要な役割を担う。身振りはコミュニケーション的な機能^レをもち、その重要性は社会心理学や民族学においても着目されている。E・T・ホール (1959) は近接学 (proxemics) に関するいくつかの興味深い研究のなかで、個人が自ら

の身体と身振りという手段を用いて、周囲にシボ的な空間を發展させる仕方を明らかにした。身体の動きを研究する動作学 (kinesics) においては、バードウィステル(1952, 1970)が非言語的なコミュニケーション・コードの分析を行った。行動生物学 (ethology) は、人間と動物の振る舞いや表現様式の類似点を調査している。この研究領域を開拓したダーウィンの『人及び動物の表情について』(1979)の研究は、こうしたコンテキストのなかできわめて興味深い源泉であり続けている。モリスたちは、ヨーロッパにおける身振りの起源と分布に関する経験的な調査を通じて類似点と差異をともに見だし、それらの比較分析を行った (Morris et al. 1979)。カリブリス (1990) はこの研究をもとに、身振りの使用に関する詳細な情報を含む、フランスにおける身振りの記号論を提示した。言語学者たち (philologists) は身体的な身振りの重要性を早くから認識しており、発話における身振りの機能を強調してきた。発話が発達する際に重要な役割を担うのは言語であるが、身体的な身振りはその言語に先立つものであり、思考や文やそれらの理解が発達するのに必要不可欠であると様々な著者たちは考えている。これらの研究はいずれも、社会的な行為や発話の表象、表現、理解にとって、身振りがいかに重要であるかを明らかにしている。また同時に、身振りを意識的に用い、統制することのできる範囲には限界があるのだということも示している。身振りと表情とが接し合う場所において、身振り化 (gesticulation) の多くは意識化されないため、それらを統制することは困難なのである。

身振りを意識的に用いることは、身体の内側にただ存在している状態から踏み出し、身体を意のままにしようとするに等しい。それが可能となるために、人間は動物とは異なり、脱中心的な位置に立つこと、すなわち自らの外側に立ち、自らに対して距離をとることができなければならない。想像力、発話、そして行為は、脱中心的な位置の媒介的な直接性の結果として可能になる (Plessner 1983)。意図的に作られた身振りや、自らの身体を制御し利用することを個人に求めるような身振りは、ミメシス的な身体的表現、統制不可能な身振りの表現の様々な形式からは区別される。たとえば、喜びや笑い、痛みや悲しみを表情によって表現することが後者に含まれる。あるいはまた、額にしわを寄せたり、頭

を振ったり、頭の位置を上下させたりといった曖昧な表現形式や、しばしば身振りの形式をとってなされる同じく不明確な表現形式も存在する。したがって、身振りは意図を表現し、表情は感情を表現すると想定したうえで、表情と身振りの間に区別を設けてみても、それはあまり正確ではない。表情はたしかに直接的で無意識的なものである。しかしながらこのことは、無意識的に生じ、統制されえない身振りが、身振りのスペクトルのうち表情を構成する側には存在しないということの意味するわけではない。この種の身振りは、様々な研究者によって「ビート・ジェスチャー」と呼ばれている。身振りのスペクトルの対極には、より意図的な身振り、すなわち図像的で、非常にメタファー的な身振りが存在する (McNeill 1992, 2005)。これらは表情を形づくり、普遍的ではなく、文化や時代、状況に固有な身振り言語のために使用される⁵⁾。

特定性に欠ける「ビート・ジェスチャー」を別にすれば、身振りは表情とは異なり、取り出し、修正し、学習することができる。表情においては、表現と感情、形式と内容、心理的な内容と身体的表現によるその表明が表裏一体となっているのに対し、意識的に用いられた身振りにおいては、これらの要素は常に分離している。このことが、意図的な身振りの形成を可能にする。理想的な身振りは、高度に文化的に形づくられた自然らしきをもたらし、心理的な内容と身体的な表現が身振りのなかで織り合っているという印象を与える。人間は身振りを内側と外側から、自分自身の表現として知覚することが可能であるため、身振りは人間の表現と経験の最も重要な手段の一つであるとみなすことができる。身振りにおいて人間は自らを体現し、その体現のなかで自らを経験する。身振りを社会的実践のなかで使用する時、われわれはわれわれの身体であると同時に、われわれの身体をもつことができる——私は私の手であると同時に、私の手を何かをするために使うことができる。人間の存在は、この変形プロセスによって可能となるのである。また、儀礼の演出と構成には、特定の身振りが必要となる。適切な身振りを上演し、配置することは、とりわけ宗教や政治といった表象的な要素が重要となる領域において、実質的な重要性を帯びるのである。

表現および表象としての身振り

人間であるわれわれが自らを所有することなく存在しており、身振りが外在化である限りにおいて、身体と内的生への関係を発展させることもまた、身振りを通じて徐々に可能となる。われわれは、人間の身振りに対するミメシス的な関係のなかで自ら表象を行うことによって、自分自身を経験する。表情と身振りにおいて、われわれは自らを外在化し、その外在化に対する他の人々の反応を通して、自分が誰であるのか、また自分がどのように見られているのかを経験するのである。身振りのなかで用いられるイメージ言語および身体言語は、文化の所産である。それは子どもたちの形成のために使用され、また子どもたちの参与を通じて作り上げられる。個人は、ミメシス的なプロセスのなかで身振りを習得することによってイメージと身体の文化的伝統へと導き入れられ、こうした伝統を支配的な状況に合うよう修正し、適合させる。身振りは、肉体的な布置状況、内面的な意図、それに世界との媒介された関係を表現する。身体感覚と精神 (psyche) は、身振りにおいて統合される。それゆえ、ある身振りのどの部分が身体的な面での喜びに起因し、どの部分が精神的な面での喜びに起因するののかという問いに対して、回答を与えることは不可能である。これら二つの側面が不可分であることは、身振りの体現性 (embodiedness) のうちに表れている。

身振りの多くは、文化的に形成された表現上の要素から創り出される。それはたとえば、顔のある部分の動きや、流動的あるいは曖昧な身振りの構成要素などである。身振りのこの生の素材がいかに関展するのかについて、多くの研究が行われ、またそれを説明するためのいくつかの試みがなされてきた。ダーウィンは表情を、かつては有用であった機能の名残として、すなわち、たとえば虫垂のように、それぞれの器官としての機能を失ったものとして説明した。この説に基づけば、怒ったときに口の形をゆがめ、典型的な仕方では前歯を露わにすることは、次のような事実によって説明されうる。すなわち、かつての人間はより大きく強い歯をもって、それを攻撃や防御の際の威嚇の身振りとして用いることができたという事実である。そして、口の表現としての動きだけが残り、結果的に前歯は退化してしまっただと想定されている。つまり、人間の表情

のある特定の形式は、現在の表情とその初期の機能との間に類似点を見いだすことによって説明されたと考えられているのである。また激怒した際に額にしわを寄せることや、特定の味覚によって生じる甘さや苦さの表情についても、同様の説明がなされる。表情における身振りの根拠については、他の説明もまた可能である。そうした説明には、(1)類似した感覚と反応の間の結びつきという原則、(2)過剰なエネルギーの解放、(3)コントラスト、が含まれる。

ダーウィンは別に、ピテリットは表情とは架空の対象を伴う行為であるという命題を提起した。この命題によって、想像力とミメシスが表情と身振りに対してもつ重要性に注意が促された。この見解によれば、表情は何らかの架空のものを指し示し、そしてこの架空のものに準拠して形づくられる。この架空の準拠点は、過去のものでもありうるし、現在のもの、あるいは未来のものでもありうる。表情や身振りははじめのうちは曖昧な形をとるが、それはいまだ存在していない何かに対するミメシス的な反応なのである。演劇においては、表情と身振りは想像されたプロットとその上演に結びついている。普段はほとんど意識されない表情や曖昧な身振りは、意識的に明確な身振りへと変形され、様式化される。こうした身振りは整えられた場面のなかの一要素となり、それは観客が劇での演技をミメシス的に処理する際にきわめて重要な役割を担う。たとえば、学校、家族、メディアといった他のコンテキストでの社会的な上演や、そこで用いられる身振りについても、同様の説明を試みるのが可能である。

多くの身振りは、直接的な表現のための形式とはならない。表現は、表情やいくつかの身振りのなかではじめて直接的なものとなる。この場合、感情や感覚の隠蔽は困難をきわめる。身体のサイン、すなわち身体の徴候あるいは身体の「言語」は、人間の精神の混じり気のない純粋な表現と見なされるのである。ラヴァーターと彼の弟子による人相学 (physiognomy) の構想は、このような結びつきを同定するための試みであった。たしかに、この試みが成功をみることはなかった。とはいえ、こうした関係性への関心が衰えてしまったわけではない。日々用いる表情と身振りによって、われわれがわれわれの身体についての知識をもっている、ということが暗示されている。この知識によって表情や身振りが生み出

され、形成され、またそれらが理解可能なものとなる。この知識は、身振りの分析や説明によって得られるのではなく、社会的プロセスへのミメシ的な参与を通して習得されるのである。

子育てと教育の形式としての身振り

身振り人間の教育において重要な役割を果たす。身振りのなかでは、内的なものとの外的なものとの一致している。人間は世界から影響を受けることに対して開かれているため、身振りは同時に、人間の潜在力を具体化 (concretising) によって制限してもいるのである。許容される身振り表現の様式がこのように限定されていることによって、社会的な帰属と信頼が生まれる。ある特定の身振りに馴染むことは、個人や集団により一層馴染んでいくことにつながる。子どもや若者は、特定の身振りが何を意味し、どのように判断され応答されるべきであるかを知る。身振りは人間の振る舞いを予測可能なものにする。身振りは身体言語の一部であり、共同体のメンバーに、互いについての多くのことを教えてくれる。これらのメッセージは、他者や、他者が感じていること、意図していることに関する意識的な知識よりもむしろ、自己と他者の無意識的な知覚に属している。とはいえ、それらが社会的にきわめて重要な意味をもつことには変わりはない。これらのメッセージは、個人が社会化のプロセスで身につける社会的知識の一部となるのであり、社会的相互行為を適切な仕方で統制するために、非常に重要なものである (Wulf 2005, 2006)。

身振りの意義は空間と時間に応じて変化する。その差異は、ジェンダーや階級との関連で観察することができる。ジェンダーや階級に特有の身振りがある一方で、ジェンダーや階級に特有の差異を含まない身振りもある。他方で、その他の身振りは社会的空間や、特定の時点、制度と結びついている。教会や法廷、病院、学校といった制度は特定の身振りの使用を求め、それが無視された場合には制裁措置が講じられる。特定の身振りの使用を要求することによって、制度は自らの権力への要求を行使するのである。こうした身振りがなされる時、制度の価値と理念は身体によって示され、その妥当性は「遂行」の反復によって確認される。今日においてもなお、こうした制度特有の表現形式には、謙虚さ (教会)、

敬意 (法廷)、思いやり (病院)、配慮とコミットメント (学校) といった身振りが含まれている。これらの儀礼化された身振りがなされない場合、その欠落は制度の代表者によって、彼らの組織の社会的 (social and societal) な正当性への批判として解釈される。その結果、原則的には制裁措置が取られることになる。こうした制度においては、大抵の人がその制度に依存しているため、制裁措置による脅威が効果を発揮する。社会のメンバーは、制度固有の身振りのミメシスを通じて、その制度の規範的な期待に従うのである。

ジェンダーに特有の差異もまた、身振りによって生じ、反復され、確認される。たとえば少女のゲームと少年のゲームには、ジェンダーに特有の差異がかなり認められる。それぞれのゲームにおいては互いに異なる関心 (協調、親密さ 対 競争) が追求されるため、結果的に異なる形の身振りが行動に移される。ジェンダーに特有の差異はまた、男女の座り方、座る場所、座る際の脚の置き方などによっても明示される。話し方、食べ方、飲み方にも同様の差異が認められる。階級に特有の差異もまた、身振りの使用において明らかとなる。ブルデューは、趣味の問題に関連して身振りにおける差異を研究し、社会階層が「わずかな差異」に基づいて確立され、強化されることを論証した。身体的な身振りとは表現形式における差異が、こうしたわずかな差異を知覚する際に重要な役割を果たす (Liebau 1992)。「文明化の過程」に関する研究のなかで、エリアス (1979) は廷臣の身振りが市民階級によって模倣され、次第に取り入れられていき、またそのプロセスのなかで変形されていく仕方を明らかにした。フーコーは『監獄の誕生』(1977)において、いかにして権力が身体に注ぎ込まれ、身体表現と表象の形式や身振りを、権力の型へと押し込めるかを示した。このように、身体的な身振りは社会的および文化的差異を創り出し、表現し、維持するという役割を担っている。身体的な身振りは、権力によって構成された歴史的、文化的なコンテクストにおいてなされるため、コンテクストの方から意味が推定されなければならないのである。

身振りによって、社会の中心的な価値についての情報と、「メンタリティーの構造」への洞察が与えられる。われわれは、中世の修道院における身振りの使用を例にとることで、身振りがある社会の階層ご

ともつ異なった機能や、身振りの使われ方がどのような仕方でも身体とシンボル、現在と歴史、宗教と日常生活の間の関係性を理解可能なものにするかを見ることができる (Schmitt 1992)。身振りは発話を伴うが、しかしまた発話とは直接関係のない「それ独自の生」をもっている。身振りの意味にはしばしば不明瞭なところがある。様々な時点や場所において、身振りは個人的な観点を強調したり相対化したり、あるいは否定したりすることによって、発話された語を補うメッセージを伝えている。身振りに対して表現される内容は、発話者の言語的な表明よりもむしろ、その感情と密接に結びついていることが多い。それは、ある人物の内的生を表現するものとしては、より意識的にコントロールされている彼／彼女の言葉よりも、「信頼できる」と見なされる。

個人、集団、組織は社会生活を営んでおり、人間共同体の振り付け (choreographies) を展開している。身体、身振り、様々な儀礼的表現によるその上演は、テキストとして読み、あるいは解釈することができる。クリフォード・ギアーツ (1983) は、社会生活に関するこうした構想を提示し、文化的人間学にとって有益な著作をもたらした。「厚い記述」によって社会的な現実を捉えようとする彼の試みは、読解可能なものとして社会生活を捉えるこの見方にふさわしいものである。身振りは、身体の社会的な上演というスペクトルのなかで著しい重要性を帯びる。それは身体言語、サイン、社会的な相互行為にとって不可欠な部分をなしており、テキストのより抽象的なシンボル体系として読むことができる。身振りに対するこのアプローチは、次の観点によって補われる必要がある。すなわち、身振りの遂行的な性格について考察を行い、身振りを美的行為および文化的遂行として理解するという観点である (Wulf et al. 2001; Wulf/Zirfas 2004, 2007)。

身振りを読み、解釈することがわれわれにとって可能となるために、身振りはミメーシス的な形式をとらなければならない。ある身振りを知覚する者は、それを模倣することによって、それゆえ身振りの身体的な表現と表象の形式に特有な性質を捉えることによって、その身振りを理解する。身振りは意味をもち、分析可能なものではあるが、そのシンボリック、感覚的な内容は、ミメーシス的な反復によってしか習得されえない。身振りの意味の様々な相を区別することと同様に重要なのは、身体的な表象と表現の

様態が、ミメーシスによってしか理解されえないということである。身振りは、身振りの上演のミメーシスを通じて身体的に処理される。したがってこのことは、言語的コミュニケーションとは異なるメディアにおいて行われる。他者による身体的な自己表現に固有な性質は、その身振りのミメーシス的な知覚によって把握される。他者の身振りに適合することで、われわれはその身体性と感情世界を経験する。他者の身振りをミメーシス的に反復することで、われわれはわれわれの個人的な境界を超越し、他者の身体的表象と表現世界へと移行する。つまり、外部を経験することが可能となるのである。

他者の身振りをミメーシス的に捉えるとき、われわれは自らの構造から他者の身振りによる表象と表現世界への「踏み出し」を、しばしば豊かさや喜びをもたらすものとして経験する。それは外部の美的・ミメーシス的な吸収を通じて、われわれの内的世界の拡大を導き、生きいきとした経験をもつことを可能にしてくれる。この経験が生きいきしているのは、他者の比類なき性質を、ミメーシスの力によってわれわれ自身の知覚において捉えることが可能になるからである。このプロセスにおいては、他者の身振りがそれをミメーシス的に捉える人物の準拠棒へと還元されるというよりも、その人物の知覚が、他者の身振りとの準拠点を含むまでに拡大される。ここで動きはそれぞれをはっきりと区別できるようなものではないが、しかしそのなかでもっとも重要なのは、個人の知覚という個人的な境界が、ミメーシスによって、他者の表象世界や表現世界を部分的に含むまでに広げられるということである。ミメーシス的な動きがこうした方向性を取ることによって、ミメーシス的に振る舞う人物は、自らが知覚するものを組み入れるというよりもむしろ、他者の身体的な身振りの方向への拡大を経験する。そしてこの拡大は、連想的なイメージを伴うものでもある。この外部へと向かう拡大によって、喜びに満ちた生の豊饒化が導かれる。これこそ、アリストテレスによってミメーシスの特質と見なされたものである。

意味を創造する様式としての身振り

社会的状況において、身振りは意味を創造するための手段となる。身振りは感情を表現し、気分を明示する。身振りは個人的な考えや内的なイメージ、

世界に関するその人物の理解を表現する。慣習化された身振りもまた、抽象的な集合表象と具体的な集合表象との対応関係を構築することによって、個人の思考に影響を与える。身振りは、内的なイメージの身体的、シンボリック的表象であると考えられる。身振りをを用いる者も、身振りを知覚しそれに反応する者も、多くの場合、身振りのなかに表れる感情や気分を意識してはいない。身振りの社会的意義は、主にこうした意識下での効果にある。このことは、制度と結びついた身振りや、その制度に内在する価値や規範、権力への要求にも当てはまる。これらの身振りは、制度に接触する人々によってミメシス的に知覚され、処理されるものでもある。とはいえ、このプロセスが彼らの意識に上ることはない。多くの場合、制度は長い時間をかけて発展してきた身振りや、制度の要求する社会的期待を表現するために代表者が用いる身振りの類型を提供する。制度の代表者は、こうした「出来合いの」身振りをを用いることによって自らを伝統と社会的期待の内部に位置づける。一方でこのプロセスは、制度によって予め形づくられた社会的身振りを受容することにつながる。他方で、このプロセスはミメシス的な性質をもつものであるため、制度の潜在力の一部である身振りはたんに再生産されるだけでなく、制度の代表者がその身振りを受容する際に修正されうる。制度によって予め形づくられた身振りのミメシスによって、制度の代表者には身振りを修正するための大幅な自由が与えられる。この自由は、身振りによる表象や表現の形式、身振りの意味の段階的な変化へとつながる。制度によって提供された身振りのミメシスにおいて、既存の伝統は表象されると同時に修正される。このプロセスは、身振りの模倣のみならず、身振りの形式と意味の創造的な体現にも含まれる。したがって身振りの社会的意義は、たとえ身振りの形式が同じままだとしても、社会の展開に応じて変化する。このことは、身振りの歴史とその展開に関する研究によって、すでに明らかにされている (Starobinski 1994)。

制度が代表者の身振りを通じて権力への要求を「体現」する際、この権力への要求は体現されたもののミメシスを通じて知覚され、維持される。こうした期待を寄せられる個人もまた、制度的な価値や規範の受容や創造的な体現に関わるミメシス的なプロセスに従事している。制度的な行為を求められ

る人々は、制度的な身振りのミメシスを通じて、制度的な身振りをもつ効果の形成に寄与する。また逆に、その際の寄与の仕方が制度の代表者の行う身振りの形式と内容に影響を与える。制度の代表者と、制度的な身振りを求められる個人との間のような相互関係は、身振りの社会的機能を理解するのにきわめて重要である。制度的な身振りのミメシスを通じて、制度の代表者とその活動を差し向けられた受容者は、身振りが用いられるたびに確認される制度や要求や妥当性との同一化を成し遂げる。身振りは制度の標章となり、当該の制度とその他の制度や社会的領域とを差異化するために用いられる。こうした標章的な身振りの形式と意味を共有する限り、誰もがその身振りを生み出す枠組みとなっている制度との同一化を果たす。身振りをミメシス的に行うことによって社会的な共通性が創造され、そのなかで部分的には身振りによって社会的関係が規制される。儀礼化された仕方で身振りをを用いることで、帰属感情が生み出され、確認される。このことは制度だけではなく、専門家集団や特定の階級、ジェンダー、機能集団にも当てはまる (Liebau 1999を参照)。

身振りとは身体的な動きであり、その文化的な意味は歴史のプロセスを通じて変化する。したがって、たとえば今日の社会において座ることが担う機能は、中世や人間が共同体での定住生活をはじめた時期におけるそれとは異なっている。身振りの意味はまた、中世といった個々の歴史的時期の内部でも変化する。社会的な行為は身振りのものであるか、あるいはその行為の意図をより明らかにするための身振りを伴うものである。身振りの身体的、シンボリック的内容を捉え、再生産し、修正する際に、ミメシスは決定的な役割を担う。ミメシスは世界との関係を身体によって表現し、表象する能力であると同時に、新たな身振りの展開をもたらすものでもある。この新たな身振りを生み出すために、ミメシスは身振りの要素を利用する。ミメシスは伝統的なコンテキストから身振りの要素を取り出し、それを新たなコンテキストへと移しかえ、必要に応じて修正を加える。あるいは、ミメシスは身体的な表現手段の在庫のなかから新たな身振りを発明する。このことは、たとえば電話や写真撮影、映画撮影、映像制作の身振りにおいて生じる。

本能への依存度が低いことと、人間の脱中心性は、

すべての身振りにとっての必須条件である。身振りは身体の動きではあるが、その肉体性に還元可能なものではない。意図は身振りの基盤ではあるが、身振りははたんなる目標定位にはとどまらない。身振りは感情を表現し、表象するものであり、事物や他の人々を指し示す。われわれは、身振りのなかで世界とわれわれ自身を同時に経験する。概して身振りには、身振りに特徴的な視野の制限が含まれる。人間は身振りのなかで世界を形づくり、同時に世界によって形づけられる。その意味で、身振りは再帰的なのである。

今後の方向性

身振りとは、身体に関連した実践的知識の表現であり表象である。身振りを分析や言語や思考のみによって習得することは不可能であり、身振りの習得にはミメシス的なプロセスが必要となる。身振りを模倣しそれに接近することによって、ミメシス的に振る舞う人物は場面的な仕方では身振りを考案、採用し、状況に合わせて修正するための技能を習得する。様々な時代における身振りの人間学的機能に関する研究を通じて、場面的な振る舞いの注目すべき社会的、文化的意味が明らかにされてきている。身振りによって社会の継続性が創出され、社会の変化が表明され、人間の振る舞いのなかで実行に移される。初期の段階ではほとんど気づかれることのない意味の広範な変化は、多くの場合、身振りの配置を変えることなく生じる。歴史を通じて身振りのなかに生じる変化には、意味の変化や、肉体的もしくは感覚的な布置状況の変化、あるいはその両方の変化が含まれる。ミメシスによって身振りの技能を習得することで、われわれは身体的な動きを用いて身振りを生み出し、それを異なる社会的コンテキストのなかで用い、支配的な要求に合わせて調整することができるようになる。身振りは組み入れられ、身体や動きの構想力 (fantasy) の一部に、よって身体に関連した実践的知識の一部になる。身体は多かれ少なかれ意識からは独立に、したがってまた自分自身から距離をとる能力からは独立に、この身振りの知識を展開させてきた。しかしそうであるからこそ、それらは長期にわたって影響力を及ぼし続けてきたのである。身振りのミメシス的、遂行的、身体的、社会的、遊戯的 (*ludic*)、想像的側面に焦点

を当てることによって、教育科学を含む国際的な研究に新たな展望がもたらされる。その発展には、社会化の領域としての家族、学校、仲間集団、メディア利用からの事例を伴う、包括的なエスノグラフィ的研究が必要となるであろう。

原注

- 1 有益なコメントをくれたわれわれのプロジェクトグループのメンバー (Birgit Althans, Kathrin Audehm, Gerald Blaschke, Nino Ferrin, Ingrid Kellermann, Rupprecht Mattig and Sebastian Schinkel) と、とりわけ長い年月にわたって研究を共にしてきたGunter Gebauer (Gebauer/Wulf 1992, 1998, 2003) からのコメントに謝意を表したい。

訳注

- 1) 本稿は、ベルリン自由大学教授クリストフ・ウルフ (Christoph Wulf) 氏が2011年10月17日に行った講演 'The mimetic and representational character of gestures: Prospects for research on gestures in the cultural and social sciences' の全訳である。
- 2) アガンベンにとって、「身振りとは、ある手段をさらしだすということであり、手段としての手段を目に見えないものにするということである」(64頁) と述べているように、身振りはそれ自体が目的であるような目的の圏域ではなく、目的を欠いた純粋な手段性の圏域にある。詳しくは、「身振りについての覚書き」『人権の彼方に——政治哲学ノート』(高桑和己訳、以文社、2005年) を参照。
- 3) プレヒトはアリストテレスが定式化した狭義の劇的演劇に対し、自らの演劇を叙事的と呼ぶ。叙事的演劇においては、感情移入ではなく登場人物の置かれている状況に驚きを感じる事が求められ、筋の展開ではなく状況の発見が重要とされる。その状況の発見すなわち異化を実現するのが、中断である。詳しくは、プレヒトによる以下の著作を参照。『プレヒトの戯曲』五十嵐敏夫・岩淵達治・長谷川四郎訳、河出書房新社、2007年。『プレヒトの政治・社会論』五十嵐敏夫・石黒英男・内藤猛・野村修訳、河出書房新社、2006年。また、解説書としては、根本萌騰子『身振りの言語——プレヒトの詩学』鳥影社、1997年が参考になる。
- 4) ミードは身振りの例として、ボクシングやフェンシング

グにおけるフェイントを挙げている。それらの競技においては、互いに攻撃と防御の大部分を考えることなく即座に行い、相手のやり方に本能的に適応させなければならない。このように、他の個体の反応にとつての刺激であるような社会的な行動の開始を「身振り」（下記邦訳では「ジェスチャー」と呼ぶ。詳細については、ミード『精神・自我・社会』川村望訳、人間の科学社、2006年を参照。

- 5) マックニールによると、身振りは発話に伴う自発的な手の動きであり、文化的に規定される非言語的な動作とは異なり、発話の意味内容や流れと密接に関連する。この身振りは、発話の意味内容に関連する「表象的身振り」と、それ自体には意味のない単純な動作の繰り返しである「ビート」に大別される。詳しくは、McNeill, David. *Hand and Mind. What gestures reveal about thought*, Chicago/London: The University of Chicago Press, 1992を参照されたい。また身振りの分類については、大神優子『情報伝達過程における身振りの機能』風間書房、2009年を参照。

文献

- Agamben; Giorgio: Agamben, Giorgio, Binetti, Vincenzo and Casarino, Cesare (translation). *Means Without End: Notes on Politics*. University of Minnesota Press. Theory Out of Bounds, V. 20. Minneapolis, 2000, pp. 49-62. (=高桑和巳訳「身振りについての覚え書き」『人権の彼方に——政治哲学ノート』以文社、2005年。)
- Aiger, Wilma: Nicht-verbales Verhalten in der erzieherischen Interaktion: Frankfurt/M. et al.: Lang 2002.
- Barth, Marcella/Markus, Ursula: Alles über Körpersprache, Ravensburg: Ravensburger Verlag 1996.
- Birdwhistell, Ray L.: Introduction to Kinesics. An Annotation System for the Analysis of Body Motion and Gesture, Louisville: University Louisville Press 1952.
- Birdwhistell, Ray L.: Kinesics and Context. Essays on Body Motion Communication, Philadelphia: University of Pennsylvania Press 1970.
- Bremmer, Jan/Roodenburg, Herman (eds.): A Cultural History of Gesture, Ithaca/London: Cornell University Press 1992.
- Calbris, Genevière: The Semiotics of French Gestures, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press 1990.
- Darwin, Charles: The Expression of the Emotions in Man and Animals, London: Julian Friedman 1979; dt.: Der Ausdruck der Gemütsbewegungen bei dem Menschen und den Tieren, Düsseldorf: Rau 1964. (=浜中浜太郎訳『人及び動物の表情について』岩波書店、1931年。)
- Egidi, Margreth et al. (eds.): Gestik. Figuren des Körpers in Text und Bild, Tübingen: Narr 2000.
- Elias, Norbert: Über den Prozess der Zivilisation. Soziogenetische und psychogenetische Untersuchungen, 2 Bde., Frankfurt/M.: Suhrkamp, 5. Aufl. 1978. (=赤井慧爾ほか訳『文明化の過程く上』ヨーロッパ上流階層の風俗の変遷／波田節夫ほか訳『文明化の過程く下』社会の変遷／文明化の理論のための見取図』法政大学出版局、2010年。)
- Flusser, Vilém: Gesten. Versuch einer Phänomenologie, Düsseldorf/Bensheim: Bollman 1991.
- Foucault, Michel: Überwachen und Strafen. Die Geburt des Gefängnisses. Frankfurt/M.: Suhrkamp, 2. Aufl. 1977 (frz. orig. 1975). (=田村俣訳『監獄の誕生——監視と処罰』新潮社、1977年。)
- Gebauer, Gunter/Wulf, Christoph: Mimesis. Kultur, Kunst, Gesellschaft, Reinbek: Rowohlt 1992, 2. Aufl. 1998 (engl. 1995).
- Gebauer, Gunter/Wulf, Christoph: Spiel, Ritual, Geste. Mimetisches Handeln in der sozialen Welt, Reinbek: Rowohlt 1998 (franz. 2005).
- Gebauer, Gunter/Wulf, Christoph: Mimetische Weltzugänge, Stuttgart: Kohlhammer 2003.
- Geertz, Clifford: Dichte Beschreibung. Beiträge zum Verstehen kultureller Systeme, Frankfurt/M.: Suhrkamp 1983. (=吉田禎吾ほか訳「厚い記述——文化の解釈学的理論をめざして」『文化の解釈学』岩波書店、1987年。)
- Goldin-Meadow, Susan: Hearing Gesture. How our hands help us think, Cambridge, Mass./London: The Belknap Press of Harvard University Press 2005.
- Hall, Edward Twitchell: The Hidden Dimension, Garden City: Doubleday 1966.
- Hüppauf, Bernd/Wulf, Christoph (eds.): Bild und Einbildungskraft. München: Wilhelm Fink 2006 (engl. 2009).
- Heidemann, Rudolf: Körpersprache im Unterricht. Ein Ratgeber für Lehrende, Wiebelsheim: Quelle und Meyer, 7. Aufl. 2003.
- Kuba, Alexander: Geste/Gestus, in: Erika Fischer-

- Lichte/Doris Kolesch/Matthias Warstat (eds.): Metzler Lexikon Theatertheorie, Stuttgart/Weimar: Metzler, 2005, S. 129-136.
- Kotthoff, Helga: Spaß verstehen. Zur Pragmatik von konventionellem Humor, Tübingen: Niemeyer 1998.
- Liebau, Eckhart: Die Kultivierung des Alltags, Weinheim/München: Juventa 1992.
- Liebau, Eckart: Erfahrung und Verantwortung, Weinheim/München: Juventa 1999.
- McNeill, David: Hand and Mind. What gestures reveal about thought, Chicago/London: The University of Chicago Press 1992.
- McNeill, David: Gesture and Thought, Chicago/London: Chicago University Press 2005.
- Mead, George H.: Geist, Identität und Gesellschaft, Frankfurt am Main: Suhrkamp 1973. (=河村望訳『精神・自我・社会』人間の科学社、1995年。)
- Morris, Desmond/Collett, Peter; Marsh, Peter; O'Shaughnessy, Marie: Gestures. Their Origins and Distribution, London: Jonathan Cape 1979. (=多田道太郎ほか訳『ジェスチュア』筑摩書房、2004年。)
- Morris, Desmond: Bodytalk. Körpersprache, Gesten und Gebärden, München: Heyne 1995.
- Müller, Cornelia/Posner, Roland (eds.): The Semantics and Pragmatics of Everyday Gestures, Berlin: Weidler 2004.
- Prange, Klaus: Die Zeigestructur der Erziehung. Grundriss der operativen Pädagogik, Paderborn: Schöningh 2005.
- Prange, Klaus/Strobel-Eisele, Gabriele: Die Formen pädagogischen Handelns, Stuttgart: Kohlhammer 2006.
- Rosenbusch, Heinz S. /Schober, Otto (eds.): Körpersprache und Pädagogik, Baltmannsweiler: Schneider Verlag Hohengehren, 4. Aufl. 2004.
- Schmitt, Jean-Claude: Die Logik der Gesten im europäischen Mittelalter, Stuttgart: Klett-Cotta 1992. (=松村剛訳『中世の身ぶり』みすず書房、1996年。)
- Starobinski, Jean: Gute Gaben, schlimme Gaben. Die Ambivalenz sozialer Gesten, Frankfurt/M.: Fischer 1994.
- Wulf, Christoph: Anthropologie. Geschichte, Kultur, Philosophie, Reinbek: Rowohlt 2004.
- Wulf, Christoph (ed.): Zur Genese des Sozialen. Mimesis, Performativität, Ritual, Bielefeld: transcript 2005 (franz. 2005)
- Wulf, Christoph: Praxis. In: Kreinath, J./Snoek, J./Strausberg, M. (Eds.): Theorizing Rituals: Issues, Topics, Approaches, Concepts. - Leiden: Brill 2006.
- Wulf, Christoph: Rituale im Grundschulalter: Performativität, Mimesis und Interkulturalität. In: Zeitschrift für Erziehungswissenschaft, 11 (2008) 1, S. 67-83.
- Wulf, Christoph/Althans, Birgit/Audehm, Kathrin/Bausch, Constanze/Göhlich, Michael/Sting, Stephan/Tervooren, Anja/Wagner-Willi, Monika/Zirfas, Jörg: Das Soziale als Ritual. Zur performativen Bildung von Gemeinschaft, Opladen: Leske und Budrich 2001 (franz. 2004).
- Wulf, Christoph/Althans, Birgit/Audehm, Kathrin/Bausch, Constanze/Jörissen, Benjamin/Göhlich, Michael/Mattig, Ruprecht/Tervooren, Anja/Wagner-Willi, Monika/Zirfas, Jörg: Bildung im Ritual. Schule, Familie, Jugend, Medien, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften 2004.
- Wulf, Christoph/Althans, Birgit/Blaschke, Gerald/Ferrin, Nino/Göhlich, Michael/Jörissen, Benjamin/Mattig, Ruprecht/Nentwig-Gesemann, Iris/Schinkel, Sebastian/Tervooren, Anja/Wagner-Willi, Monika/Zirfas, Jörg: Lernkulturen im Umbruch. Rituelle Praktiken in Schule, Medien, Familie und Jugend, Wiesbaden: Verlag für Sozialwissenschaften 2007.
- Wulf, Christoph/Göhlich, Michael/Zirfas, Jörg (eds.): Grundlagen des Performativen. Eine Einführung in die Zusammenhänge von Sprache, Macht und Handeln, Weinheim/München: Juventa 2001.
- Wulf, Christoph/Zirfas, Jörg (eds.): Die Kultur des Rituals, München: Wilhelm Fink 2004.
- Wulf, Christoph/Zirfas, Jörg (eds.): Ikonologie des Performativen, München: Wilhelm Fink 2005.
- Wulf, Christoph/Zirfas, Jörg (eds.): Die Pädagogik des Performativen. Theorien, Methoden, Perspektiven, Weinheim/Basel: Beltz 2007.